

一、次の1～8の——線をつけたカタカナを漢字で、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- 1 今週はカミツなスケジュールでつかれた。
- 2 治安が乱れ、悪事がオウコウしている。
- 3 サイゲンなく続く話にうんざりした。
- 4 ジュンジョウな子どもをだましてはいけない。
- 5 車のモケイを組み立てる。
- 6 計画の骨子をまとめる。
- 7 蒸気機関車の汽笛が鳴る。
- 8 ここは昔の関所だ。

二、ア～エの中でAとBの関係がそれぞれ一つだけ違うものがあります。その記号を選び、書きなさい。

- | | | | | |
|---|------------|----------|-----------|--------|
| 1 | ア A 見つかる | B 見つける | イ A 受かる | B 受ける |
| | ウ A 折れる | B 折る | エ A 変わる | B 変える |
| 2 | ア A 行く | B 行ける | イ A 読む | B 読める |
| | ウ A 着る | B 着れる | エ A 掘る | B 掘れる |
| 3 | ア A くださる | B ください | イ A みなさる | B みなさい |
| | ウ A いらつしやる | B いらつしやい | エ A うるさがる | B うるさい |
| 4 | ア A はげむ | B はげみ | イ A 甘い | B 甘み |
| | ウ A 出会う | B 出合い | エ A 連れる | B 連れ |

三、次の詩を読み、後の問いに答えなさい。

空にむかって

岩佐 敏子

春の空に

なやみをうちあけたら

春の空は

きいているのか

きいていないのか

どこふく風と

① どんより かすんだ目をして

そっぽを向いていた

夏の空に

いせいよく声をかけたら

夏の空は

いつも つっぱっているから

すぐ腹を ② て

③ やら

夕立のシャワーを

あびせて

あれくるった

秋の空に

かなしみを伝えたら

秋の空は

しずかに

だまって聞いてから

澄みきった

④ 青空の中に

なみだを

すいこんでくれた

冬の空に

相談ごとをしたら

冬の空は

くもりのない

はれやかなおをして

りんとして

たちむかうようにと

遠くから

ながい 陽ざしを

なげかけてくれた

1 線①「どんより かすんだ目をして／そっぽを向いていた」とありますが、これはどのような様子をあらわしていますか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア やる気のなさそうな雲が空にいくつか浮かんでいる様子 イ 冷たい霧がかかり、空気全体がひんやりしている様子
ウ 雨雲におおわれた空から、涙のような雨がしたたる様子 エ どちらを向いても同じような青空が続き、単調な様子
オ 空気が湿り気を帯び、空がすっきりと晴れ渡らない様子

2 ②にあてはまることばとしてふさわしいものを、二字で考えて書きなさい。

3 ③にあてはまることばとしてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア イナズマ イ にわか雨 ウ カミナリ エ 台風 オ しぐれ

4 線「なみだを／すいこんでくれた」とありますが、この時の気持ちはどのようなものですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 秋の空に励まされ、明るい未来に向かってわくわくする気持ち

イ 悲しみが少しずついやされて、安らかになっていく気持ち

ウ 空までももの悲しく、自分に寄り添ってくれて嬉しい気持ち

エ 心にほっかりと穴が開いたような、どうしていいか分からない気持ち

オ 青空の中に自分自身まで吸い込まれるような不安な気持ち

5 この詩の特徴としてふさわしいものを、次の中からすべて選び、記号で書きなさい。

ア 各季節の空のイメージをよく伝える詩である。

イ 擬人法が用いられて、空と対話している様子が描かれている。

ウ 冬の空は、曇りがちな空から冷たい光が差し込む様子である。

エ 季節の空を通して、作者が成長していく様子が描かれている。

オ 空の大きさに包まれる余韻が体言止めで表されている。

四、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

記録として保存され、私たちがおぼるげながらであってもこの国の歴史をわかりはじめるのは大和朝廷の頃です。この頃の日本を語るには、なんといっても、聖徳太子の存在が重要です。

聖徳太子は実在の人間ではなかったとか、十七条の憲法も彼が作ったものではないなど諸説あるのも確かです。それはともかくとして、聖徳太子という人物が語り継がれてきたという、その価値観が大切なのです。

何ゆえに彼が語り継がれてきたか。

①それは、太子が行なったとされる政治や統治が、(注)進取の気性に満ちていて、寛容の精神と人間的な愛という、日本人の性質にぴったりと寄り添うものだったからだと思います。

聖徳太子は数え歳で19歳の時、現代の高校三年生ぐらいの年齢で、推古天皇の摂政として、日本国の首相となりました。この時代の日本にとって非常に重要な問題は、宗教と外交でした。宗教では、なんといっても仏教の伝来が大きな問題でした。太子が登場する50年以上も前に日本に伝えられていて、その仏教を受け入れるかどうか議論になっていました。

当時の日本の宗教は、日本古来の神々を敬い祭る神道でした。神道とはどういう宗教かといえば、山にも川にも、森にも池にも湖にも、一本の樹木にも石にも、自然のすべてに神が宿っているという考えです。

今はこの神社にも立派な建物がありますが、古代神道には建物など何もなく、たとえば大きな石の上に、御幣紙をつけた棒を立て、そこに、天から神が降りてくるというような、きわめて素朴な形だったのです。

その神々の前に、いかにも絢爛豪華な金の仏像を持った神が現れたのです。これは物部氏と蘇我氏の政治論争になり、戦争にまで発展しました。

しかし、聖徳太子が摂政になったとたん、②とパッと結論をくだしました。「新しい宗教を受け入れるけれども、それは枝と葉っぱであって、神道は幹なのです」という教えも定着させていきました。古来の神々への敬いを忘れてはならないとして、聖徳太子は新しいものが入ってくると、皆、そちらばかりに心を奪われてしまふけれど、それではいけないという敬神の詔を出しました。

これは特筆すべきことです。海外諸国の場合、たとえば(注)十字軍を見てみると、彼らはキリスト教だけが正しいと信じて、武力でキリスト教に改宗させたり、言うことを聞かなければその民を虐殺したりしました。このように宗教というのは、えてして、排他的で、唯我独尊なのです。

でも、日本における宗教はそうはなりません。聖徳太子がそのようになさらなかったということは、日本人の④A特性を反映していたはず。

聖徳太子という人物が本当に存在したかどうかについては論争がありますが、聖徳太子という人物がいて、彼が仏教を受け入れ、古来の神々も大事にしました——ということが、物語として今まで語り継がれてきたこと自体、日本人にとってはそれが正しく、大事なことであったことを示しています。つまり、日本人の価値観を表しているのです。

世界を見回してみても、このように④B宗教観は日本だけの特徴なのではないでしょうか。

アメリカの政治学者であるサミュエル・ハンチントンが『文明の衝突』という書物の中で、世界を8つの文明に分類しました。そして、日本を日本文明として、そこに所属するのは日本だけであるとしましたが、それはとても鋭い分析だと思いませんか。宗教心において、まさに、これほど寛大で、優しい民族はいない。人によっては、そのことを宗教心がないとか欠如しているとか言いますが、⑥その批判は違うと思います。

(桜井よし子『日本人の美德』宝島社による)

注1 進取 Ⅱ 進んで新しいことに取り組もうとすること

注2 十字軍 Ⅱ ヨーロッパのキリスト教徒が聖地エルサレムをイスラム教徒から奪還するために結成した遠征軍

1 線①「それ」の具体的な内容は何か。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 聖徳太子の気性

イ 聖徳太子が語り継がれてきた理由

ウ 聖徳太子の価値観の大切さ

エ 聖徳太子が行なった政治

オ 聖徳太子に対する人々の評判

2 ②にあてはまる文としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 「神道も立派な神社を建てなさい」

イ 「仏教を中心にして神道も受け入れます」

ウ 「神道だけで仏教は受け入れません」

エ 「両方とも受け入れません」

オ 「両方とも受け入れます」

3 線③「唯我独尊」にもっとも近い意味の慣用句を、次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 目が利く

イ 鼻にかける

ウ 口が減らない

エ 歯が立たない

オ 耳が痛い

4 ④A、④Bに共通してあてはまることばを、次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア あいまいな

イ 妥協的な

ウ 勤勉な

エ 穏やかな

オ 無関心な

5 線⑤「鋭い分析」とありますが、なぜ筆者はそう考えるのですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 『文明の衝突』の中で世界の文明をはっきりと8つに分類しているから

イ 日本以外の文明をそれぞれ共通性によって分類しているから

ウ 宗教に対する日本人の特殊性を理解しているから

エ 宗教に対して日本人に「貫性がないのを知っているから

オ 日本の文明が世界のどの国よりも進んでいるとしているから

6 線⑥「その批判は違う」とありますが、なぜ筆者はそう考えるのですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 日本は宗教心が薄いことにより、発展してきたと考えているから

イ 宗教は他の宗教の存在も認めるべきだと思っているから

ウ 自分だけがハンチントンの真意を理解したと自負しているから

エ 聖徳太子を宗教心のない人間だとはとても思えないから

オ キリスト教以外の宗教も、もっと広まるべきだと感じているから

7 この文章の主題としてふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 歴史における聖徳太子の功績について

イ 歴史における宗教上の影響について

ウ 聖徳太子に見る日本人の気質について

エ 聖徳太子の宗教に対する考えについて

オ 日本における無宗教の由来について

五、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

ここまでのあらすじ

…ある日「ぼく」の自転車が駐輪場からなくなり、これを機会に新しい自転車を買ってもらおうとします。しかし両親からは自転車を探してくるように言われ、お母さんと一緒に毎日探してみることになりましたが、なかなか見つかりませんでした。

母さんは、一月たっても少しもあきらめる様子がなかった。池のある公園のまわり、野球場、サッカー場と、子供の集まりそうな所は、くまなく探した。がけの草むらの中には、まっ赤にさびついたサドルのない自転車が、ひっくり返っていた。大きなアジサイの株の根元には、三輪車が転がっていた。

ぼくの三輪車は、初孫の誕生を喜んだ大阪のおじいちゃんが、大阪で買って東京まで送ってくれたことを母さんが教えてくれた。

「こっちで買う方が安いのにね。『人と違う方がいいだろう』って。あなたが生まれて一カ月で送ってきたのよ。一年半も押し入れの中に入っていたわ。外へ出すようになって、人と違うせいか、あなたがすぐ自分の三輪車を見つけて、走って行くの

を見ると、賢そうに見えて嬉しかったわ。親心ね。愛は盲目」

母さんの話は、いつも脱線する。

おじいちゃんは、ぼくが三歳の時に亡くなったので、ほとんど記憶にないけれど、白と黒のバトカーのような三輪車は、幼稚園に入ってから乗っていたので、よく覚えている。近所の子に譲ったので、今も、その子が乗り回しているのを見ると、なつかしい。

失くなった自転車だって、クリスマスにもらったものだった。クリスマスに、サンタクロースの手紙といっしょに届けられた時も嬉しかったことを覚えているが、何といっても、よく覚えていて嬉しかったのは、補助輪をはずした時だった。

補助輪をはずし、父さん以後ろをおさえてもらって、練習した。何度も転んで、最後にかんしゃくを起こして、道にひっくり返って泣いた。父さんは、静かに言った。

「はずかしいな。自転車に乗るのは泣いたって上手にはならないぞ。自分で工夫して乗ってみるんだ。足が下についているから、大ケガをすることもないだろう。父さんは見てやる」

近くのベンチに腰を下ろして、ぼくのすることを見ていた。

確かに、足は地面についた。ペダルを先の上に持つてきて、右足をしっかり乗せ、ぐいっと踏み込むようにすると、自転車はヨロヨロと前に進んだけれど、左足を乗せるゆとりはなかった。こわいと思ったら、足がつくと、自転車は倒れなかった。足をつけば、ひっくり返らずにすむと思うと気が楽になった。①父さんの方を見ると、父さんは、うなずいてくれた。

何度も、一回しかペダルに足が乗らないのをくり返しているうちに、今まで斜めになっていた車体と体が真つすぐになったような気がして、右、左とペダルを踏み続けてみた。今までより、ヨロヨロと前に進んだ。確かに前に進んだ。何回かくり返すうちに、少しずつ乗れる距離がふえて、母さんが見に来た時にはまっすぐな所をペダル十回ぐらい進めるようになっていた。母さんは、父さんに嬉しそうに言っていた。

「やるじゃない。さすが私の子だ」

ぼくは、それから三日ほど、朝から晩まで必死になって自転車に乗った。カーブも坂もスピード乗りもマスターしてしまった。あの時は、②大人になったような気がした。

カギがこわされているもの。サドルのないもの。チェーンのはずれたもの。パンクして、タイヤがとび出ているもの。すっかりサビついているもの。大人の自転車。子供の自転車。おびたしい、自転車の残がい、かくし絵の動物たちのように、団地内の土手、スロープのかけ、木のしげみの中にかくれていた。さすがのぼくだって、もったいないと思った。新品のような自転車もあった。

名前は消されたのか、住所の途中までしか書いていなかった。

「あんなの、もらえちゃいそうだね」

ぼくは、新品そうなのをみつけた時、母さんに言った。

「③名前はすぐ消せるんだって。許可を得てなければ、人のものよ」

ぼくは、毎日自転車探しをしているうちに、④何かへんだと思いはじめた。友達にきいても、自転車を一回はなくしている。出てくることもあるが、大半は探もしないし、出て来ることもない。カギがかかっている、なんの足しにもならない。お金が盗まれば、大騒動になるだろうけれど、自転車だと、すぐあきらめてしまって、届けを出さない人もたくさんいた。自分の自転車を探していると、まだ乗れる、いや、きのうまで乗っていたと思える自転車が何台も乗りすてられているのだ。

人の物にさわるのがこわくないのかな。誰かに「それ君の」とか「これ、ぼくのだよ」って言われたらどうするのかな。黙って渡せるのかな。「君はどうぼうだ」と、言われないと思っているのだろうか。

「借りたのです」と言うのだろうか。

借りるということは、ことわって借りることだし、必ず返すということなのだ。

だれも見ている人がいなかったとしても、自分だけは知っているんだ。いつまでも、幼稚でおろかな心では限らない。しまったと思った時には、けっして軽い失敗ではないはずだ。

ぼくは、自転車がなくなった、内心「しめた」と思ったことを思い出した。母さんや父さんがしつこく探すことをしなければ、今頃、新しい自転車を得意になって乗りまわしていることだろう。あんなに苦労して、はじめて乗れるようになった自転車だったのに、簡単に手離そうとしていたのだ。

ぼくはポスターを描いた。五年も乗っている自転車だ。すみから、すみまでわかっていた。ぼくの自転車は白と黒で、マン

ガの絵はついていなかった。英語で、SUPERとチェーンカバーのところに書いてあった。

後ろのどろよげがへこんでいた。ずっと前に、歩道橋のスロープを曲がりそこねて、自転車だけが階段を転がって、ぼくは、自転車から投げ出され、階段のへりに横倒しになったことがあった。後から来ていた母さんは、夕食の時に父さんにおもしろおかしく報告した。

「まるで、映画のスタントマンのようにかっこ良かったわよ」

さすがの父さんもあきれたように言った。

「君は何を考えてるんだ。自分の息子が生死の境にあったのになあ」

母さんは、妙に重大事を軽く考える風がある。今風に言うところ「頭がライトなのだ」。ライトもこわれていた。

「夜自転車に乗ることもないから」と、そのままになっていた。

サドルのクッションもほつれていた。本当は、ほんの少しのほつれを、カギでひろげたものだった。少し、古くなったオレンジ色のスポンジがのぞいていた。

絵や文をつけると、どの傷にも、説明がつけられた。⑤「ぼくの自転車」だと思った。

近くのスーパーに頼んで、三日だけポスターをはってもらうことにした。

マーケットのガラスまどにはられると、絵が入選したようで、はずかしいような、はれがましいような気がした。絵を注目してくれる人は少なかった。効果はありそうもなかった。

母さんは、団地に配られるミニコミ紙にのせてもらえるようなのんだ。

「自転車のサイズ、色、メーカー名、住所、氏名、TEL、他には」

「『おもいでたくさんあります』と付け加えてもらってね」

ミニコミ紙に載せてからは、学校から帰ると、反応を母さんに確かめるのが日課になった。

自転車がなくなつて、二カ月もたち、草の根を分けても探すまでいつていた母さんも、さすがにくたびれてきたようだった。母さんはコーヒーをすすりながら、がっかりしたように言った。

「きょう、もう一度探してもなかったらあきらめようか」

「音を上げたの」

「そうね。人間不信におちいりそうよ。自転車がほしくて、ほしくて盗るわけではないし、まして、必要だけど、どうしても買えないという経済状態じゃないのよね。盗っても平気。盗られても平気。立派な自転車が野ざらしになっても平気」

「そうだね。でも、ぼくだって、きょうまで軽く考えていたよ。友達が、そのへんの三輪車のりまわしていても注意なんてしないもの」

「お互いに、どこか神経がまひしているんだわ」

「母さん、⑥ ぼくN駅の駐輪場をもう一度探してみるよ。あそこは、学校や塾があるので、ほうほうから子供たちも大勢集まるよ」

「そうね。じゃ、母さんはT駅の方をみてみましょう。さつ、即実行」

ぼくは、歩いて三十分ほどの、隣町のN駅に行ってみた。道中も探してみたけど、ぼくの自転車はなかった。

N駅には、三カ所の駐輪場があった。団地に近い駐輪場にはなかった。商店街につながる駐輪場にもなかった。その二つだけでもないやになるほど時間がかかった。三つ目は、今までで一番大きい駐輪場だった。どこから手をついたら良いのかと思うほどだった。

「必ずみつかる」

おまじないのように心の中でつぶやいてから、ぼくは一列ずつ探しはじめた。ところどころ札がつけられていた。長いこと駐輪しているためにつけられた警告書だった。三分の二ほど探した時、大きな柱の陰に見覚えのある自転車がかった。ぼくは、何度も確かめた。うつすらと土ぼこりをおぼり、警告書がつけられていたが、まぎれもなく、ぼくの自転車だった。

「あったー！」

カギはこわされていた。ぼくの自転車はぼくをじっと待っていてくれた。

「帰ろう。帰ろうよぼくの自転車」

自転車は、少しギコギコしていた。でも、ぼくは嬉しくて、風の中をぐりぬけるような気持ちで自転車をこいで家へ帰った。

1 線①「父さんの方を見る」とありますが、これはどのような気持ちによる行動ですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア なぜ父さんは助けてくれないのだろうという、うらめしい気持ち
イ 一応コツをつかんだので、もうゆるしてほしいという気持ち
ウ 足についてこいでいるので、その欠点が指摘されることを心配する気持ち
エ 父さんの言葉の正しさと自分が進歩していることを確認する気持ち
オ もう少しで乗れそうなので、母さんにも見せたいという気持ち

2 線②「大人になったような気がした」とありますが、なぜこのように思ったのですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 自分の力だけで目の前の壁を乗り越えられたことによって自信がついたから
イ 自分の才能をほめられ、一人前だと認めてもらったことが誇らしかったから
ウ それまでできなかったことができるようになり、自分でも成長を感じられたから
エ 自分がまるで、一つのことを完全に習得しているプロのようで、気恥ずかしかったから
オ 父さんや母さんを見返すことができ、気持ちがいさなしたから

3 線③「名前はすぐ消せるんだって。」とありますが、このことにはどのような気持ちがこめられていますか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア ぼくの自転車が見つからなければ、この自転車をもらってあげようかな、という気持ち
イ きっとぼくの自転車も名前が消されているので、注意して探さない、という気持ち
ウ 名前を消したとしても、盗んだことがわかると大変なのでやめてほしい、という気持ち
エ まだ新しくても、名前が消えている程度ではさすがにもらうのは恥ずかしい、という気持ち
オ ぼくが安易な気持ちで他人の自転車に対する発言をしたことをたしなめたい、という気持ち

4 線④「何かへんだ」といいますが、ぼくが「へんだ」と思った内容としてふさわしくないものを、次の中からすべて選び、記号で書きなさい。

ア 自転車よりお金を盗む方が重罪であること
イ 平気でだまって人のものを使えること
ウ 自転車をなくしても探そうとしないこと
エ 自転車どろぼうが幼稚な心から成長しないこと

5 線⑤「ぼくの自転車」という表現には、どのような気持ちがこめられていますか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア すみずみまで理解しているこの自転車こそ自分のものだという気持ち
イ 自転車の絵はあまり似ていないが、みんなに気づいてほしいという気持ち
ウ 早く新しい自転車はほしいが、やはり古い自転車も捨てがたいという気持ち
エ 思い出がたくさんあっていて、どんな状態でも美しく感じてしまう気持ち
オ 似たような自転車があっても、自分の自転車の種類は見分けられるという気持ち

6 線⑥「ぼくN駅の駐輪場をもう一度探してみるよ」と言ったのはなぜですか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 母さんに、あきらめるといふ決断をしてみようと思ったから
イ 近所よりも、少し離れたところに隠してある予感がしたから
ウ ものを失うことや、盗む行為を気軽に認めたくなかったから
エ 長く協力してくれたお母さんの顔を立ててあげようと思ったから

7 線⑦「嬉しくて、風の中をくぐりぬけるような気持ち」とありますが、具体的にどのような思いですか。次の中からふさわしくないものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア あきらめずに自転車を探し出したことによる達成感
イ 自転車の古さといく感じるような、物への愛着
ウ 自転車の発見を早くお母さんに伝えたいという希望
エ 初めて自分の自転車の魅力に気づいたことによる新鮮さ
オ 自分の自転車の大切さを再発見したことによる喜び

②②A 国語解答用紙

8	7	6	5	4	3	2	1	一

4	3	2	1	二

	小計
--	----

5	4	3	2	1	三

	小計
--	----

7	6	5	4	3	2	1	四

7	6	5	4	3	2	1	五

受験番号	氏名
A	

	得点
--	----